オンラインを活用した市政広聴会を開催

問 総合政策課（本庁舎内）☎82-0916

コロナ禍における広聴事業の一環として、オンラインを活用した市民との意見交換を対象者別に市民プラザで開催しました。市民が誇りを持って「帰ってこいよ」と言えるまちづくりをテーマに、市長をはじめとする関係職員が、「定住」「子育て」「教育」など、生活に密着した課題や様々な分野の提案について、オンライン参加者と意見を交わしました。主な提案・意見と市の回答などを紹介します。

■とき／７月２４日（土）「学生対象」
柏原高等学校、氷上高等学校、氷上西高等学校、看護専門学校、市内出身大学生
■とき／８月１日（日）「女性対象」
久下自治振興会、NPO 法人Ｔプラス・ファミリーサポート、どんぐり食堂、氷上子育てサークルぴょんぴょんクラブ、丹波市ＰＴＡ連合会、丹波市商工会女性部、丹波根っこの会
■とき／８月８日（日）「一般・団体対象」
たんば“移充”テラス、個人事業主、株式会社 IPPO、丹波市地域交通活性化協議会、丹波市商工会事務局、農の学校事務局、農の学校卒業生、NPO 法人森の都研究所

学生対象 7/24（土）

「丹波の活性化や知名度向上のための〝まちあるき〟を企画したい」

授業の一環で丹波市の活性化や知名度を上げるための「まちあるき」を検討している。「まちあるき」による消費などの経済効果や、地域の外国人労働者、外国人の親世代との交流のほか、マスコットキャラクターちーたんの知名度の向上や交流人口増加を期待している。

市回答 地域は、人と人とが結びつき・集い・活動して活性化する場である。市内外の人に丹波市の魅力を知ってもらうことや、再発見してもらえる良い機会になると思う。市内でも大学連携などにより学生が訪れて活動している。「まちあるき」によって楽しみながら、人と人とのふれあいを広げてほしい。それが「帰ってこいよ」につながる。

「市内3高校合同プロジェクトで丹波市をもっと有名にしたい」

丹波栗で「丹波市をもっと有名にしたい」と思い、市内の高校３校で「世界一大きいモンブランをつくる」合同プロジェクトを立ち上げた。このプロジェクトの成功に向け、資金集めや、場所の提供、広報など市にも協力をお願いしたい。

市回答 色々な制約があり、資金集めは大変だと思うが、どのように集めるかは皆さんで考えて欲しい。ＳＮＳで資金を集め、ＩＣＴ機器を市内の学校に配った皆さんの先輩の例もある。色々な人から話を聞きながら調べてみてほしい。また、会場や方法など具体的なことについては、市長室に相談に来てほしい。

「医師・看護師以外の医療従事者を育成する施設の設立」

老年人口が増加しているこの圏域において、特に理学療法士、作業療法士、言語聴覚士の存在は貴重であり、これらの人材の育成は就労者「子育て世代」、高齢者「地元の住人」の相互にメリットがあるのではないかと考える。

市回答 市の医療を充実させるための医療従事者確保とキャリア向上に向けた貴重な意見をいただいた。現段階で市として何ができるかは

分からないが、他地域の事例も研究しながら少しでも丹波市の医療が充実するように検討していきたい。

「市の知名度を上げるための空き家の利活用」

空き家を利用して宿泊やバーベキュー、花火ができるような施設を作るのはどうか。空き家の多い集落内すべてを宿泊施設に改造し、一つのテーマパークのようにしてしまえば話題性も狙え、丹波市の知名度向上につながると思う。

市回答　空き家の問題は丹波市でも大きな課題であるが、「空き家の多い集落内すべてを宿泊施設に改造してテーマパークのようにする」取り組みは、丹波篠山市において、集落消滅に危機感を持った5世帯19人の全住民が外部の専門家との協力で、空き家を宿泊施設やレストランとして活用して再生を図った「集落丸山」が全国的にも先駆的な成功事例と言われている。このような取り組みにあたっては住民が主体的に取り組むことが不可欠ではあるが、市としても地域課題を解決するため、地域の方々と対話を重ねていくなかで、積極的に支援していきたい。

女性対象　8/1（日）

「山南中学校の利活用」

丹波市教育委員会を旧山南中学校に移転し、現山南支所と「ちーたんの館」を研究や教育の場にし、周辺一帯を「フィールドミュージアム」にすることはできないか。

市回答　旧山南中学校については、地域の意見も伺いながら検討すべきと考えている。現在、教育委員会や他の公共的な用途で利用する予定はなく、地域での活用も難しいと聞いており、民間活用を進める方向で検討している。また、市内には3つのミュージアムがあり、そのフィールドは市内全域である。特に、丹波竜については、化石発見現場や丹波竜の里公園を含めた山南地域の広範囲を主なフィールドとして、地域の振興にもつなげていきたい。

「子育て活動への支援」

丹波市は子育てに適した環境だと感じている。子育て世代がつながる場所をつくりたい。低所得や一人親家庭、障がい、疾病、高齢などの困難を抱える人たちにも利用してもらい、みんなで支えあえる場にしたい。

市回答　市においては、「丹波市地域福祉計画」や「子ども貧困対策推進計画」の中に、「地域（子ども）食堂」をあげている。困窮の子どもだけでなく、高齢者、障がい者、その他、広く全ての人が利用でき、地域の困りごとなどの生活課題を発見し、「支援につなげる場」、あるいは「地域住民のつながる場」の一つとして位置づけている。地域食堂への支援については、県や丹波市社協の補助制度があり、これらを活用した取り組みをお願いしている。市としても、助成制度の情報提供や制度へのつなぎなど、必要な支援を行っていきたい。

「雇用機会の拡充・通勤利便性の高い交通の実現を」

子どもたちが大人になり、現役世代として帰ってくるためには雇用機会の拡充や、都市などへの利便性の高い交通の実現が必要だと思う。

市回答　市内には世界レベルの技術を持った企業や地域資源を素材とする商品の製造に取り組む企業、また、女性が働きやすい環境の整備や人材育成に力を入れる企業など、やりがいをもって働ける企業が数多くある。しかし人手不足に悩む事業者が多い。うまくマッチングができればと考えている。また、鉄道の複線化が実現すれば、都市部への移動時間が短縮されるため、複線化を国に要望している。市としては駅駐車場の利用料金助成やＩＣＯＣＡポイントの付与など鉄道利用の増進に取り組んでおり、皆さまにはぜひ、普段から鉄道を利用していただきたい。

参加者は自宅や職場、学校などからオンラインで参加しました。

「田舎での生活モデルをPRしては」

丹波の景観や環境の良さをうまく活用し、地域として活性化させていくように取り組んでいく必要がある。「移住」となると、ハードルが高いため、丹波での生活モデルが見せられるような取り組みができないか。

市回答　これまでの移住対策は空き家の利活用と移住支援が密接に関係していたことで、良好な空き家がなければ移住につなげられないという課題があった。

　移住はハードルが高いので、戸建ての空き家に加えてアパートなどの賃貸物件も紹介できるよう検討を進めている。お試し移住についても、お試しワークを含めて検討するなど、今回の提案も含めて、移住ニーズに応じた多様なバリエーションを提供できるように取り組んでいきたいと考えている。

市民プラザ前に設置されたモニターを見る人たち

一般・団体対象　8/8（日）

「帰ってこいよと言えるまちづくりについて」

施策の方向性は理解できるが、「帰ってこいよ」は丹波市出身者に向けられる言葉で、Iターン、Jターン希望者を軽視する印象などを与えるのではないか。

市回答　「帰ってこいよ」というのは、移住の問題にも関係するが、全般的に丹波市民が出ていく問題を「帰ってこいよ」で、つないでいきたい。「来たい、住みたいまちに住んでもらう」こと、「出て行かないで」といった意味合いもある。インパクトのある言葉として「帰ってこいよ」を使っている。帰ってこいよといえるまちづくりに向けて、まずは子育てをメインプロジェクトに進めており、今年度は妊娠や出産を祝福し、子育て世帯の経済的負担の軽減を目的として祝い品を進呈する、ハッピーバースの取り組みを実施。また、公園施設の充実を図りながら、全庁をあげて移住定住を見据えた施策を展開するような雰囲気づくりをしている。

「20歳～30歳代の若い世代のUターンを支援」

20歳～30歳代の若い世代のUターンを支援するような施策があれば良いと感じている。

市回答　市外で活躍する若い世代に対して、市内の企業情報をどう伝えるかが課題である。まずは、ふるさと住民登録制度で、企業紹介、移住希望者への移住インターン、子育てしやすい企業が増えていくように働きかけをしていきたい。

　今、住んでいる人が自信を持って「丹波市がいい」と言うことが大事。多様な働き方ができる環境をもった企業ができるように市も努力をする。

「有機野菜のPR・地元野菜の活用拡充」

有機の里であるということの認知度が意外と低いと感じる。有機に限らずおいしく新鮮な野菜が近くで手に入るので、地元野菜の活用や、スーパーなどでの地元野菜コーナーの拡充があればと思う。

市回答　有機農産物を販売されているところが市内にあまり存在していないことが一つの理由であると考える。現在進めている、おばあちゃんの里の再整備工事を契機に、施設内にある農産物直売所において、市内で収穫された有機農産物やひょうご認証農産物など、付加価値の付いた農産物を販売するブースを新たに設置し、来店者や市内の消費者へ啓発できるように取り組んでいきたい。

「地域のルール案内や若い世代に向けた地域情報を発信」

近所付き合いの方法がわからず戸惑うことがある。転入時のルールが記載された案内などが欲しい。また、若い世代が行きたいと思う場所の紹介が少なく、積極的な情報発信が必要だと感じる。

市回答　転入時には窓口で「丹波市暮らしのガイド」「防災マップ」「ゴミカレンダー」「ゴミ分別ガイド」の配布や案内をしている。日役などは自治会によって異なるため、一律に案内することはできないが、今回の意見を参考に改善すべき点がないか検討する。

　また、若い世代が行きたいと思う場所の紹介については、ポータルサイト「SATURDAY TAMBA（サタデー タンバ）」などを通じて情報発信しているが、

伝えきれていない部分がある。近年は移住者されてきた人が農家民宿やパン工房など、特色ある取り組みなども多くあるので積極的に取り上げていきたい。

「獣害対策への支援や新規就農者に対する支援」

電気柵などの獣害対策支援は、個人単位ではなく広い範囲での獣害対策（電気柵など）の支援が必要。また、新規就農者として農業を始めるために農地が必要だが、少しでも条件の良い農地が借りられる仕組みがあればもっと農業が始めやすいと感じる。

市回答　獣害対策については、できる限り広範囲で電気柵を含む獣害防護柵を設置し、設置後の日常点検や修繕作業などは農会や自治会単位での「地域ぐるみ」での取り組みを推進している。また、野猪等被害防止策等設置事業などの補助制度も設けており、資材の80％は市が支援している。大きなブロックで獣害対策をすれば効率的である。ぜひ、最寄りの農会などにも相談して欲しい。

また、新規就農者に向けた農地のマッチングについては、新規就農者それぞれが希望される営農形体に応じた農地の選定が重要であると考えている。就農相談や面談を実施する中で新規就農者の営農形体を把握し、条件のあった農地が借りられるよう農業委員会と連携し農地のマッチングに取り組んでいる。

「安全安心で持続可能な公共交通サービスを」

デマンドタクシーや鉄道、路線バスとの連携を強化し、新しい生活様式に適応した持続可能な公共交通サービスや、安全で円滑に移動できる機能が維持されたまちづくりが重要だと感じる。

市回答　市では住み慣れた地域で暮らし続けていただけるよう、利便性の高い移動環境の実現を目指し、地域公共交通活性化協議会で協議いただきながら公共交通の充実に向けて取り組んでいる。

今年度は9月からデマンド型乗合タクシーの木曜日運行にかかる社会実験を行う。公共交通は市民生活になくてはならない社会インフラであり、これからも丹波市スタイルの公共交通が維持・発展できるよう引き続き取り組んでいく。

「子どもたちが帰ってきたくなる美しい里地里山景観」

市の総合計画で、農地保全、河川管理、森林づくりを含めた市全体の景観整備に係る長期ビジョンを掲げ、丹波市の美しい里地里山の景観が、多くの人たちを引きつける魅力として未来に継承してほしい。

市回答　美しい里山景観は、市の貴重な地域資源であり、総合計画では、「農地の保全や里山景観などに配慮した開発指導を行う」「緑豊かな森林の保全や里山の眺望景観を確保する」ことなどを掲げ、現在取り組んでいる。次の計画を策定する際には今回の提案も参考にしたい。

※掲載の提案意見や回答内容は、紙面の都合により一部を抜粋して掲載しています。

広聴事業について

今回の広聴会はコロナ禍によりオンラインで開催しましたが、21組25人の参加者により、各分野の参加者から様々な提案・意見を拝聴することができました。

また、会場の市民プラザ入口と、ゆめタウンゆめ広場のモニターで意見交換の様子を放映したことで、広聴の場を知ってもらえる機会となったことなど、参加者からも「大勢が集まる場では発言しにくい面があるが、モニターを通して市長との直接意見交換ができたことは、有意義であった」との声もありました。

引き続き市民に寄り添えるよう広聴の重要性を職員全体で共有するとともに、市の施策や事業などを世代に応じた情報発信をすることで、市民の市政への関心を高め、各世代から意見を拝聴する広聴事業の充実を進めていきます。

そのほかの提案意見や回答については、市のホームページでも確認できます。

ホームページ